二〇一八年度

T 国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてＨＢの黒鉛筆またはＨＢの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
　　ＨＢの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
　　なお、問題番号は一～三となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにＨＢの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5
○ ○ ● ○ ○

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

苦しみのない、安堵の感覚だけがあって、それに甘えている意識のなかに横たわっていた。そこにだれがいるのか、わたしの人生がどこまで来ているときのものかわからなかったが、わたしにはそのようなことは少しも気にならなかった。わたしは甘えていられさえすればいいのだった。

(1)目をあけると、横たわったわたしの身体はぶるぶると震えていた。鼠色の闇がひたひたと迫って来ていて、仄かに窓ごしに西天のあかるさがわかった。わたしは今、日没直後の世界にいるらしかった。薄闇も、室内の空気も、わたしのよこたわっている毛布も震動していた。遠く貨車が(イ)シッソウするとどろきがつたわって来ているのだった。貨車は重い積み荷を満載して、仄かにあかるい西天の方向に向かっていた。

まぶたが重いのは、酔いがのこっているせいだった。たしか、あれからわたしは四合瓶を手もとにひきつけて飲んだのである。牛乳やパンを食べたあとでどうして飲みだしたのか。その欲望には(あ)猥雑味があっていやだ、と思った。しかし、どうしてこれほどまぶたが重いのに目があいたのか。この震動の襲来にも、とうに馴れている筈であるのに。

たしかに、異なる刺戟もまた介在していた。目覚めへの引き鉄になったのはそっちのせいにちがいない。わたしは仰向けになったままそのものを見つめようとした。そこには垂れ下がる曲線を描きながら、その先端をわたしの額に触れさせている一枚の細い草の葉があった。今はそれを視覚によってはっきり確認することは出来ないが、それは、この部屋に仕事上の用件を持って来た人が置いていった草花の束を、わたしが花瓶に插しておいたものである。酔ったわたしはその花をつみとって、部厚い辞典のあいだに插さみ〈これで永遠の美としてのこる〉と呟いてから、そこへ横たわったのであり、そのためにすでに花を失った、葉だけのものになりはてている筈であった。その葉先は、そのような悪戯者のわたしを咎めているのか、からかっているのか、貨車の震動とともにわたしの額をこまかくかつ素早くこすりつづけていたのだった。

わたしはわずかに身体をずらせてその葉の像が結ぶような位置まで遠ざかってみた。すると葉は、急速に深まっていく闇のなかで弓のかたちにしなっていて、今度は闇を擽らせようとその細くなっていった尖端をこまかく不定形を描く形でうごかしているのだった。そしてその根元の方はといえば、わざと無骨な凹凸をつけた半透明のガラス管の形の瓶にさしこまれていた。その瓶のなかまでは、とても確認出来なかったが、そこには、ヘンケルのナイフでざっくりと切られた断面を晒している茎があるはずであり、茎は臭いを放ちはじめている水にひたされているはずであった。

わたしは、この室内で出会っている唯一の生物が描いている曲線を、容れ得るものとして眺めていたが、その時、かつて中学生の頃読んだ学習参考書に掲載されていた実験を思い出した。それは、植物の茎の断面を色素を溶かした水に入れて、その色のついた水が導管を通って吸いあげられていくさまを見る、というものだった。赤インクを吸いあげていく茎はその管の形を、腫れあがっているようにはっきりと紅に染めて見せる筈だった。わたしは、今は濃い闇のなかに溶けこんで行こうとしている葉をながめながら、(2)それは気の毒な行為だ、という気持ちになっているのだった。

植物が生きているということを認めながらも、われわれは平気で鋸をつかい、鎌をつかう。生きているといっても痛覚はないだろうし、また意識などあるわけがない。われわれは厳密にではないが、そう考えている。わたしが酔って花をひきちぎったのも、水揚げをさらによくするために、ヘンケルを使ったのも、その前提に立っていた。それに誤りはあるだろうか。

木はそのような時に、人には聞こえない声をあげて叫んでいるのだ、という小説を読んだことがあった。そういう想像はおもしろいけれども、まず現実では考えられない。木は人や犬のように苦しみはしない。

しかしどうなのだろう。わたしは今、闇の部屋にいて、葉と自分がいることを知っているが、それはわたしがその葉が存在することを知識として知っているからだろうか。たとえば、今、われわれはともに闇のなかにいてほとんど相互は判然としないが、もしわれわれが決闘の相手として銃を握りしめ、ひとつの部屋の、思い思いの

物陰に身を潜めているのだとすればどうだろうか。すぐに相手の気配を知るだろうか。(3)わたしはそう考えて、しばらくじっとうごかずにいて相手の気配をうかがったのだった。

だが、わたしの感覚器が充分な精度を持っていないのか、それともそもそもそういうことが意味のない考えであったのか、残念ながら何の手応えも得られずじまいであった。だが、わたしは、どうやら前記二つの、いずれでもない、と考えた。それは、われわれの意識のありように大きな質的相違があって、わたしはそれをうけとめる術を持っていないのではないか、ということだった。そして、(4)植物が生物である限り、それは必ず〈意識〉を持っている筈だった。それは、わたしのような者にとっては、今述べたように検出は遂に不能であるような質のものであるかもしれない。しかし、それが生きている、ということは、その状態の内部になんらかの正の符号を冠された充実と緊張がなければならない筈であった。その充実と緊張が、〈無〉ともいうべき岩石や金属の内部と等しい状態である、ということがどうして出来ようか。その充実と緊張は、さらに増殖や形成を予感するであろうし、またそれを実行するだろう。そのことをおそれなしに無視してはならない、とわたしは考えたのだった。

その時、わたしは自分が、はっきりと目覚めて来たことを意識した。わたしは今日、乳嘴腫(注1)を切除してもらってここへ帰りつき、そこで不安をまぎらす気もあってか、四合瓶を空にしていぎたなく眠りこけたのだった。わたしは自分の肉体という系が、過熟ないし老衰というステージに至って乱れを見せはじめている、ということを今日、はっきりとした形で知らされたのであり、今、一枚の細長い葉を眺めるときにも、(5)その今日の事実のてりかえしを浴びずにものを考えることが出来ないのだった。

腫れ物はまた生えてくる。培地がそれに適する状態になっている以上、そう考える方が自然だった。いや、すでに、どこかに生えているかもしれなかった。そのことを想像するととてもいやな気がした。

しかし、それが果たして自分の一部かどうかは疑問だ、というのが、わたしが先刻から思っていることだった。たとえば巨大な悪性腫瘍になると、それは自分のなかに血管(注2)を引き込んで栄養分を補給するというが、それをどう考えるか。もし原因が外から来たもの——たとえば濾過性病原体などがかかわっていて、それが指令を下して

いるのだとすれば、(6)わたしはまだ気を楽にすることが出来るが、しかし、大半の場合、現在の病理学ではそのようなことは否定されているようであった。とすれば、それはわたしという生命の分裂に他ならない。そしてわたしの主体は、そのものに責任があるのだろうか。

少なくともそのものは、わたしの存在と烈しく関わっている、といえる。わたしはそう思った。(7)その証拠は、〈痛み〉だった。わたしの感受したところによれば、その痛みは、(ロ)ヒフクを剝がされた肉の芽そのものの痛みが伝わって来たものである、と思われた。その感覚が正しいものであるとすれば、それがヒフクを剝がされることによって陥った危機を、わたしの痛覚を媒介にして母胎としてのわたしに訴えて来ている、といい得るからであった。それによって、わたしの、保護なり治療なりの行動をひきおこそう、というものだった。

しかし、もしその痛みが、肉の芽そのもののものではなく、芽と、正常なわたし自身の肉体の部分――つまり鼻孔の内側の粘膜との接点にあったとした場合、その持つ意味あいは変わらなければならない。その時、わたしが感じるのは、正常な肉体が異物の寄生に対して発する警戒の叫びとしての痛みであり、それ自身の痛みではないはずであった。その時、われわれは確実に異なるものとして、(う)袂を分かった、といえるように思われた。

そのいずれであるのか、わたしはいくどか繰り返してその時の感覚を思い出そうとし、なおかつ判然としないのだった。大体は芽そのものの痛みであったようにも思われたが、また同時にその痛みが鼻粘膜の奥に根を張っていたとも思い出され、なかなか、はっきりとした結論を出させないのだった。

この事実は、いずれにせよ、すでにのべたようにそこに烈しい葛藤が起こっていることのしるしであった。そしてそれはとりもなおさず、この腫れ物が良性であることのあかしであるようにも思われた。悪性のものは組織をひそやかに(い)シンジュンし、しかも痛みを伴わずにその行動を始めるという。そこには欺瞞がある、といわざるを得なかったし、悪性にふさわしいありようだと思われた。

わたしは闇のなかでまた、鼻孔の傷痕に指を触れた。今朝まで存在していたものはたしかに消えていた。火傷のわずかな痛みが、のこり火のように、その位置を告げるばかりだった。しかしわたしは、そのことが判りきっ

たことであったにもかかわらず、また触れたのだった。(8) おそらく、また幾度となく触れることになるはずであった。

（三木卓「胡桃」による）

（注）1 乳嚢腫――皮膚や粘膜にできる良性腫瘍。乳頭腫。
2 濾過性病原体――ウイルスのこと。

問

(A) ═══線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(B) ～～～線部(あ)～(う)について。本文中の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。

(あ) 猥雑味
1 まとまりのない中身
2 けちくさい感じ
3 騒がしい様子
4 不純なおもむき
5 不道徳な印象

(い) いぎたなく眠りこけた
1 がまんできずに眠り込んだ
2 浅ましいすがたで寝ぼけた
3 辺りをはばからず眠り続けた
4 いたしかたなく眠りに落ちた
5 意地汚く眠りをむさぼった

(う) 袂を分かった
1 別々に進んだ
2 別れを惜しんだ
3 互いに対立した
4 関係を断った
5 気持ちを理解した

(C) ――線部(1)について。「わたし」はどのようなきっかけで「目をあけ」たのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 食事の後から飲んだ酒による酔いの不快感。
2 日没の後に部屋の空気が急に冷たくなったこと。
3 重い積み荷を満載した貨車の震動が遠くから伝わってきたこと。
4 花瓶に挿してあった草花の葉の先端が額をこすりつづけたこと。
5 乳嚢腫の切除を受けた後に感じた自分の肉体についての不安感。

(D) ――線部(2)について。そのような「気持ち」になった理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 植物が、自らの痛みを直接訴えられないことを残念がっているように感じたから。
2 植物の命が、たいした意味もなく無駄にされているように感じたから。
3 植物には痛覚も意識もないという考えを、根本からあらためる必要があると感じたから。
4 植物が、茎を切断された痛みをわたしの視覚に訴えているように感じたから。
5 植物が生きているということを、軽く考えているように感じたから。

(E) ――線部(3)について。「わたし」が「じっとうごかずにいて相手の気配をうかがった」のは、どのような「考え」からか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 仮に人間同士であれば気配が感じられるかもしれないのだから、生きている植物であっても相手の気配がわかるのではないかという考え。
2 互いに抱いている感情がとても強いものであれば、たとえ闇のなかであっても相手の気配を知ることができるはずだという考え。
3 部屋に葉が存在するという知識を意識のなかから追い出してしまえば、闇のなかで純粋な葉の気配が感じ

とれるのではないかという考え。

4　闇の部屋のなかで、自分が銃を握りしめた決闘の相手のようにふるまえば、植物であっても何らかの気配を発するのではないかという考え。

5　わたしが今、闇の部屋にいて葉の気配を感じているのは、葉がいることを知っている知識によるのか、葉の意識によるのか、確かめたいという考え。

(F)　――線部(4)について。植物の〈意識〉について別の表現で言い換えている部分を、本文中から句読点を含めて二十字以内で抜き出し、その初めの五字と終わりの五字を記せ。

(G)　――線部(5)について。その具体的な説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　日頃から生きているものに対するおそれなしに生活していることに、改めて気づかないではいられない。

2　植物の自然な増殖や形成を、自分の肉体の乱れの進行と関連させて意識せずにはいられない。

3　自分の肉体が乱れを見せたのは、生命へのおそれを無視したためだと後悔せずにはいられない。

4　一枚の葉を眺めていても、今日の病院での出来事の鮮明な記憶がよみがえるのを止めることができない。

5　自分の肉体の乱れが不安になって、一枚の葉の生命のはかなさでさえ真剣に考えないではいられない。

(H)　――線部(6)について。「気を楽にすることが出来る」理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　濾過性病原体が原因だとわかれば、病気になったことにあきらめがつくから。

2　濾過性病原体が原因だとわかれば、医者に対処を任せることができるから。

3　濾過性病原体が原因だとわかれば、その進行にわたし自身は無関係だと思えるから。

4　濾過性病原体が原因だとわかれば、手の施しようがないことがはっきりするから。

5　濾過性病原体が原因だとわかれば、自分の生活には原因がなかったと思えるから。

(I)　――線部(7)について。ここでの「わたし」の〈痛み〉をめぐる二通りの考えを次のようにまとめた。空欄

□に入れる言葉を、句読点を含めて十八字以内で記せ。

わたしの感じる〈痛み〉が、
肉の芽そのものの痛みであった場合、それは肉の芽が自らの陥った危機を母胎に訴えている痛みであり、
腫れ物はわたしの一部であることになる。
それに対して、〈痛み〉が、
肉の芽と接する粘膜の痛みであった場合、それは□痛みであり、
腫れ物とわたしは異なるものであることになる。

(J) ――線部(8)について。「わたし」がそう考える理由はなにか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分の肉体の乱れを考えれば、その場所に再び乳嘴腫ができると考えておくのが自然だと思ったから。
2 自分にとって何であったのか正体のわからない腫れ物が再びできることに、不安を感じているから。
3 切除した乳嘴腫が本当は悪性腫瘍だったのではないかという不安が、完全には払拭されていないから。
4 乱れを見せはじめた肉体を何度も確認することで、自分に注意を促したい気持ちがあるから。
5 その場所に存在していた腫れ物の痕跡を確認することは、自分の生命の確認だと思い至ったから。

(K) 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 わたしは、腫れ物そのものであれ粘膜であれ、痛みはそれが良性であることのあかしと思い安心した。
2 わたしは、乳嘴腫を切除した日、恐怖に駆られて植物の意識についてとりとめのないことを考えた。
3 わたしは、植物には意識も痛覚もないというそれまでの自分の考えは疑わしいという結論に達した。
4 わたしは、充分な感覚器の精度を持っていなかったので、植物の意識をうけとめることができなかった。
5 わたしは、自分の生命から自分を脅かす腫れ物が分裂することをどう理解してよいかわからなかった。

二　左の文章は、後漢の隠者梁鴻が孟氏の娘を妻として迎えた時の話である。これを読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

勢家慕其高節、多欲女之、鴻並絶不娶。同県孟氏有女、状肥醜而黒、力挙石臼。択対不嫁、至年三十。父母問其故。女曰、「欲得賢如梁伯鸞者。」鴻聞而娉之。女求作布衣、麻履、織作筐、絹績之具。及嫁、始以装飾入門。七日而鴻不答。妻乃跪牀下請曰、「窃聞夫子高義、簡斥数婦。妾亦偃蹇数夫矣。今而見択。敢不請罪。」鴻曰、「吾欲裘褐之人可与俱隠深山者爾。今乃衣綺繡、傅粉墨。豈鴻所願哉。」妻曰、「以観夫子之志耳。妾自有隠居之服。」乃更為椎髻、著布衣、操作而前。鴻大□曰、「此真梁鴻之妻也。能奉我矣。」

（『後漢書』による）

（注）
1 勢家――勢力を誇る名家。
2 女――娘を嫁にやること。
3 同県――平陵県。今の陝西省咸陽市の西北。
4 伯鸞――梁鴻の字。
5 娉――めとること。
6 麻履――麻で編んだくつ。
7 織作筐――はた織り仕事の竹かご。
8 績――糸を紡いだり布を織ったりすること。
9 簡斥――遠ざける。
10 妾――女性の自称。
11 偃蹇――つれない態度をとる。見向きもしない。
12 請罪――自分がどのような罪を犯したのか相手に問う。
13 裘褐――粗末な着物。
14 綺縞――絹織物。
15 粉墨――おしろいと眉墨。
16 椎髻――髪を後に垂らして一つに束ねたまげ。
17 操作――仕事をする。家事をする。

問

(A) ――線部(1)について。「装飾」の内容にあたる本文中の語句として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 布衣　2 麻履　3 綺縞　4 隠居之服　5 椎髻

(B) ――線部(2)について。なぜ梁鴻は七日間反応しなかったのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 梁鴻は、美しく着飾って化粧をし、隠者らしくない姿で嫁いで来た孟氏の娘を、自分の妻にはふさわしくないと感じたから。

2 梁鴻は、自分が世間で言うほどの賢さを持ち合わせているわけではないことを、それとなく態度で示そう

としたから。

3　梁鴻は、孟氏の娘が準備したわずかな嫁入り道具では、山中での不便な生活を送るにはとても足りないと判断したから。

4　梁鴻は、妻になりたいと強く希望する孟氏の娘に、隠者としての生活の厳しさを示し、その覚悟を見極めようとしたから。

5　梁鴻は、三十歳まで相手を厳選し結婚しなかった女性にとって、自分が本当にふさわしい夫であるかどうか迷ったから。

(C)　――線部(3)の書き下しとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　吾は裘褐の人の与ふべきを欲して俱に深山に隠るる者のみ

2　吾は裘褐の人を欲して俱に深山に隠るる者に与ふべきのみ

3　吾は裘褐の人の与に俱に深山に隠るべき者を欲するのみ

4　吾は裘褐の人を欲して与に俱に深山に隠るる者なるべきのみ

5　吾は裘褐の人と俱にすべきを欲して深山に隠るる者のみ

(D)　――線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　わたしが願わずにいられようか　　2　わたしの願いが叶うはずがない

3　わたしの願いはきっと叶うだろう　　4　わたしが願っているものではない

5　わたしの願いをぜひとも叶えたい

(E)　空欄［　　］に補う言葉として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　恐　　2　憂　　3　詐　　4　喜　　5　罵

(F)　本文の内容に合致するものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　梁鴻は、孟氏の娘から与えられた教訓によって、隠者にとっては節操がなによりも大事であることによう

やく気づいた。

2　孟氏の娘は、隠居したいと願っている賢者梁鴻を、なんとかして世間のためにもう一度役立たせようと一計を案じた。

3　隠者には隠者の装いがあり、官人には官人の装いがある。身分に合った服を身に着けているうちに、中身も伴ってくるものである。

4　隠者の生活は、必ずしも山奥で暮らすことではなく、夫婦で隠者の志を保っていれば、俗世間に身を置いたままでも実践できる。

5　孟氏の娘は、梁鴻の志を試すために、わざと隠者の妻にふさわしくない美しい服を着、おしろいや眉墨をつけて嫁いできた。

三　左の文章は、『苔の衣』という物語の一節である。帝が妹の弘徽殿の宮の部屋を訪れ、父嵯峨の院の意向の通りに、弘徽殿の宮を大将と結婚させようと考えている場面から始まる。大将は、亡き右大臣の娘（本文では「女君」あるいは「上」）を妻として幸せな結婚生活をしているが、かつて右大臣は、娘に対する帝の求婚を断って、娘を大将と結婚させたという経緯があった。これを読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

弘徽殿に帝渡らせ給へば、御箏の琴弾きすさみ給ひて、桜に紅梅の細長など、なよらかに着なし給へる御様のらうたげにこめかしうて、御髪もすこし色にて少なやかにものし給へど、かかりなどいとあてやかに見え給へば、いまだ衰へ給はぬほどに同じうはこの大将の事とくあらまほしく思し召すに、「いと受けずげなること」[注1]とは御覧ずれど、「さのみ言ひてはいかがあるべき。[(1)]またこの有様とても、見初めきこえて、さしもかひなくなどはよに思ひきこえじ。[(a)]さもあらば冬ごろただ押して譲りてん。[注2]嵯峨の院なども返す返すのたまひしことなり」[注3]と思しなりぬ。かつは、右の大臣などのいと便なきさまに受け引き奉らで、[注4]左右無く思ひ譲りたるもめざましう思し召して置きたる末なるべし、殿の参り給へるにも「かくなん思ふ」[注5]と仰せらるれば、[(2)]返す返すかしこまる由を申し給ふ。[(b)]大将殿はこのことを聞き給ふに、いとあぢきなく心憂く思されて、[注6]「数ならぬ身一つをだにも我が心に任せぬよ」[(3)]と、世もすさましうむつかしう思されける。何事も聞こえ合はせつつ過ぐし給へば、[注7]ましてこのことは隔てあるべきならねば、「かかることなん」[注8]と女君にほのめかし給ふに、あるまじきこととは思さねど、[(c)]「さばかり大臣の後ろめたげに言ひ置き給ひしはことわりなりけり。いつしかかくて人笑はれになりぬべき身にこそ。かやうのことを聞き給はましかば、いかに本意なく思さ［　　］。[(5)]もの思ふまじくてや先立ち給ひけん」[(4)]など、方々いとあはれに思して涙ぐまれぬるを、このことをあさましう思ふとや思さんと、[(イ)]苦しくて紛らはし給ふ。[(ロ)]この御気色を見給ふに、[(6)]いみじからんかぐや姫なりとも何かはせんとぞ思さるる。

弘徽殿の宮の御事やうやう世の中に漏りきこえて、「さばかりいみじきものにし給ふ上も、帝の御娘には並びえきこえ給はじ」[注9]、「内裏の御気色のさばかりめでたかりしを否び奉り給ひて、この大将に譲り給ひし心地、[(7)]大臣の

隠れ給ふままにいつしかかくなり行くべきや」、かつは「その便なきを帝の君も思し詰めたりけるにや」、「大将殿の御有様、げに当帝の御婿にてもあへぬべき」など、世人やすからず言ひ悩むぞ聞きにくき。

（注）
1 いまだ衰へ給はぬほどに――弘徽殿の宮の容姿がまだ衰えなさらないうちに。
2 この大将の事――この大将との結婚話。
3 いと受けずげなること――大将は弘徽殿の宮との結婚を承諾しそうにないことだ。
4 譲りてん――弘徽殿の宮を大将に嫁がせてしまおう。
5 受け引き奉らで、左右無く思ひ譲りたる――右大臣が、帝の求婚を承諾し申し上げないで、簡単に娘を大将に嫁がせたこと。
6 殿――大将の父。
7 このこと――弘徽殿の宮との結婚話のこと。
8 何事も聞こえ合はせつつ過ぐし給へば――大将と女君とは何事も話し合ってお過ごしになっているので。
9 さばかりいみじきものにし給ふ上――大将があれ程大切になさっている女君。
10 内裏の御気色――帝の御意向。

問

(A) ――線部(1)から読み取れる帝の気持ちとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 大将が承諾しないようだが、どうしてなのだろう。
2 大将が承諾しないようなので、どうすればいいのだろうか。
3 大将が承諾しないようなので、どうすることもできない。
4 大将が承諾しないようだから、諦めてしまおう。
5 大将が承諾しないようだが、話を進めてしまおう。

(B) ――線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 嵯峨の院が、弘徽殿の宮と大将との結婚を望んでいる様子
2 弘徽殿の宮が、院の姫君として大切にされている様子
3 弘徽殿の宮の容姿がかわいらしく、とても優美である様子
4 大将が、右大臣の娘との結婚生活に満足している様子
5 大将が、弘徽殿の宮との結婚話を承諾しそうにない様子

(C) ――線部(3)の現代語訳を四字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(D) ――線部(4)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分自身のことでさえ　2 せめて自分自身のことだけでも
3 女君の身の上でさえ　4 せめて女君の身の上だけでも
5 我が身だけでなく女君までも

(E) 空欄□に補う助動詞として最も適当なものを記せ。

(F) ――線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 帝は私が悲しむだろうことを配慮してくださらないで、先走って話を進めなさったのだろうか。
2 殿は帝からの縁談を断るわけにはいかないと思って、先に承諾なさってしまったのだろうか。
3 大将は帝からの縁談を受けるか否かの判断ができなくて、先に私に相談なさったのだろうか。
4 大臣は悲しい思いをしたくないというおつもりで、私より先にお亡くなりになったのだろうか。
5 私は悲しい思いをしたくないので、この縁談が成立する前に死んだほうがよいのではなかろうか。

(G) 〰〰線部(イ)・(ロ)はそれぞれ誰の動作・行為か。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 嵯峨の院　2 帝　3 弘徽殿の宮　4 殿

5　大将　　6　右の大臣　　7　女君

(H)　――線部(6)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　女君がかぐや姫のようにすばらしい女性であるから、何とか悲しませたくない。
2　女君はかぐや姫のようにすばらしい女性であるが、今回の縁談は断るわけにいかない。
3　弘徽殿の宮がかぐや姫のようにすばらしい女性であっても、何にもならない。
4　弘徽殿の宮がかぐや姫のようにすばらしい女性ならば、今回の縁談は断りたくない。
5　自分にかぐや姫のような超人的な力があったら、何とかできるかもしれない。

(I)　――線部(7)について、誰の「心地」か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　嵯峨の院　　2　帝　　3　弘徽殿の宮　　4　殿
5　大将　　6　右の大臣　　7　女君

(J)　――線部(a)～(c)は、それぞれ誰に対する敬意を表すか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1　嵯峨の院　　2　帝　　3　弘徽殿の宮　　4　殿
5　大将　　6　右の大臣　　7　女君

(K)　次の各項について、本文の内容に合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　右大臣は、自分の判断で娘を帝ではなく大将と結婚させたが、それでも不安な気持ちを抱いていた。
ロ　帝は、弘徽殿の宮の容姿は全く非の打ちどころもなく魅力的で、誰が見ても絶賛すると思っている。
ハ　殿は、帝が過去の遺恨の腹いせに大将の幸せな結婚生活を壊そうとしていると推測している。
ニ　殿は、大将の幸せな結婚生活を壊したくないと思い、大将と弘徽殿の宮との縁談話を恐る恐る断った。
ホ　人々は、大将は院の婿としてだけでなく、現在の帝の婿としても充分にふさわしいと噂した。

【以下余白】